

## 指折りの読書家

石川 六郎

大平さんに初めてお目にかかったのは、たしか昭和三十年代の中頃であつたと思つ。岸内閣から池田内閣への政権交代があつて、大平さんが官房長官に就任された頃のことである。五十歳前後で政治家として脂の乗り始められた頃であつた。それ以来およそ二十年の間、総理官邸をはじめご自宅、スリーハンドレッドクラブ、夏の軽井沢、鹿島平和研究所あるいは末広会、大雄会といった大平さんを囲む経済界の有志の集まりなど各所でお目にかかせていただく機会が多かつたが、大平さんはいつも謙虚で寡黙で、それでいながら大変親しみやすい態度で接して下さり、われわれは遠慮なく率直なご意見をうかがうことができたので、非常に満ち足りた気分になるのが常であつた。寡黙とはいえ、お話になられたことを文章に書いてみると、一言の無駄もなく実によく整理されており、頭の中で冷静に組み立てられた上でのご発言であることに、いつも感服させられたものである。

大平さんは、私の存じ上げている限りわが国の政治家のなかでも指折りの読書家であられ、私どもで経営している八重洲ブックセンターにおひとりでおみえになり、たくさんの本を買い込んで行かれたこともある。各種の会合の折りなどに、「最近お読みになつた本のなかで印象に残つておられる本は何ですか」とうかがうと、たちどころに和洋を問わず数冊の本の名をあげられ、われわれはお教えたいた本を買い求めて読んだものであつた。総理になられて初のご渡米の直前、東京で日米欧三種の民間人の代表会議が行われた折り、総理官邸で総理主催の昼食会が催され、大平さんが出席者全員を前に英語で演説されたが、これを拝聴して私はその流暢さに驚か

された。その後つけたまわったところによると、英語は学生時代から堪能であられたそうで、お人柄から考えてこうしたご才質の豊かさを他にも多く内に秘めておられたことと思つのである。

大平さんは、また、焼き芋が大変お好きで、気のおけない会合の折りなど、焼き芋屋の売り声が外から聴こえてくるとすぐに人を走らせて買い求め、バターを塗り目を細めておいしそうに頬張っておられた姿が印象深い。

私の義弟にあたる平泉渉代議士は、昭和四十年に初当選以来大平さんに終始「厄介になつたが、昭和五十四年の選挙で油断のため苦杯をなめた後、大平さんは私の顔を見ると「申しわけない、申しわけない」とあたかもその落選に全責任があるかのように謝られ、大変恐縮したものであつた。倒れられる四日前に、建設業界の集まりである社団法人日本建設業団体連合会の総会パーティーにおいてになり、ご挨拶をして下さつたが、その際もわざわざ私のところへ足を運んで「今度は絶対当選させましょう」と握手して下さいました。後日、佐藤寛子夫人（佐藤栄作氏夫人）とお会ひした折りうかがつたところによると、大平さんが倒れた五月三十日の選挙戦初日に新宿で自民党総裁として第一声を上げられた際、宣伝カーに同乗された寛子夫人に「平泉君が心配だ。どうしても当選させなければならぬ」と話されたそうで、そのこともあつて同夫人は、選挙戦終盤の最も多忙な時期に令息信二代議士への応援をいったん打ち切つて、平泉氏の選挙区である福井に駆けつけ、数千名の聴衆を前にしてこのことにも触れた感動的な名演説をして下さつた。聴衆のなかには感涙にむせぶ方々もおられ、これが同氏の高位当選への原動力となつたわけであるが、これもひとえに大平さんのご遺徳によるものと感謝せずにはいられない。

史上空前の衆参同時選挙という熾烈な選挙戦の最中に倒れられた大平さんの無念さを思うと、まことに痛恨の極みであるが、ご遺志は女婿森田一氏により立派に継承されつつある。ご生前のご懇篤なご指導に対し改めて感謝の念を込め、心からご冥福をお祈り申し上げるばかりである。